

丹波の漆かき

漆は、漆の木の樹液に由来する天然の素材です。漆は丹波地方で 1300 年以上収集されており、古くは漆で年貢を納めていたようです。そして明治時代（1868 年～1912 年）までに、この丹波地域には 500 人以上の漆かき職人がいたようです。しかし戦後、合成樹脂塗料の導入と安価な漆の輸入により国産の漆の競争力は低下し、また気候変動、害虫、森林の生態系の変容などの環境要因により、漆生産者にとってさらに多くの困難が生まれたのです。

丹波漆はその高い品質で有名であり、その技術は数少ない漆かき職人によって大切に伝えられてきました。この漆の採集の工程は、漆の木の栽培から始まります。樹齢が 10 年以上になると、6 月から 10 月までの季節を通して樹液が徐々に採集されます。それぞれの木から収集できる漆はわずか 200ml ほどです。その後、貴重な樹液を最後の一滴まで集めるために木は伐採され、根に新しい木が挿し木され栽培されることになります。

丹波の漆かきは、1991 年に京都府の無形民俗文化財に指定されました。福知山にある「やくの木と漆の館」は、小さな博物館のような建物で、専用の道具や採集過程の様子などが展示されています。また小さなショップやギャラリーもあり、予約制で漆器のワークショップも開催されています。